



2010. 2. 20

マーク制作: 関知磨子(秋津コミュニティ: 蚊帳の海一座)

(融合研のホームページ) <http://www.yu-go.info/>

(事務局) 〒273-0122 千葉県佐倉市中志津7-17-4 (TEL&FAX) 043-463-1929

本号の内容

○巻頭言: 渡辺喜久副会長 「節から芽が出る・節から芽を出す」第14回融合フォーラム

※「第14回融合フォーラム in 富士山のまち富士宮」の概要(案)も掲載されておりますので、よくお読みになって、10月3日(日)は、今から空けておいてください。

1 第13回融合フォーラム in 神奈川の報告

※新しい試みが多数あり、内容的にも大きな成果をあげました。

2 役員会報告

※プログラム研究開発委員会が、会員へのアンケートを検討しています。

3 事務連絡

○会員継続について

○2011年度以降のフォーラム開催の立候補・役員立候補を受け付けます。

※現在、大阪支部が検討中です。

巻頭言 「節から芽が出る・節から芽を出す」第14回融合フォーラム

融合研副会長 渡辺喜久

平成3年、文部省から生徒指導の研究指定を受けて、私は富士宮第三中学校の研修主任として初めて学社連携に取り組み、それ以来、学社連携・融合にかかわり来年度で20年目を迎えます。その間、富士宮市教育委員会に異動し、生涯学習の推進のため学社融合事業(学校・社会教育融合事業)を起こしました。本事業は、現在も予算化され課の重要な事業として10年が経過しました。

平成22年3月23日、今勤務している芝川町立芝川中学校は、富士宮市との合併により富士宮市立芝川中学校になります。私は、最後の芝川町立の校長であり、最初の富士宮市立の校長となります。芝川中学校では、学校経営方針として「授業と学社融合を核とした学校経営」を掲げ、5年が終わろうとしています。そして、来年度をもって私は定年を迎えます。20年、10年、5年、合併、定年とさまざまな意味で自分にとっての大きな節目を感じます。

芝川町は筍の名産地で、町のいたるところに竹林があります。その関係もあって、私は、入学式や始業式などの節目で、竹を例にとって「節から芽が出る」という大自然の営みにあらわれる摂理をもとに、飛躍をするときには「節」を生かすことの大切さを話します。平成22年度は、まさに自分にとっての今までにない大きな「節」だと思っています。だからこそ今年は「節から芽が出る」のを待っているのではなく、積極的に自分から仕掛けて「節から芽を出す」つもりでいます。

その一つが、2002年ミニフォーラムに続いて2回目の大会になる「第14回融合フォーラム in 富士山のまち富士宮」の開催です。以下、その概要をお知らせします。実際の企画はこれから実行委員会を立ち上げ、事務局と相談しながら進めていくこととなります。

【本大会 10月3日(日) 会場:富士宮市役所 午前9時30分～午後3時45分】

大会テーマ「融合で啓く未来社会(案)」

9:30-9:45 開会式

9:50-11:20 全体会(基調提案:4分科会の代表事例の発表)

- ①食と学社融合 ②学校からのアプローチと学社融合
③地域からのアプローチと学社融合 ④家庭教育と学社融合

12:20-14:00 分科会

14:15-15:35 シンポジウム(内容は未定)

15:35-15:45 閉会式

なお、前日の10月2日(土)は、芝川中学校の授業参観・PTA教育講演会と融合研の研修会を兼ねた催しも検討しています。授業では、学社融合を取り入れた内容も考えています。また、大会では、富士宮市教育委員会社会教育課が進める家庭教育の推進を図るための市民大会と第④分科会「家庭教育と学社融合」の融合を試みたいと思っています。

1 「第13回融合フォーラム in 神奈川」の報告

今年で13回目を迎えた融合フォーラムが、これまで長期に渡って実績を積んできた神奈川県厚木市で以下のように開催されました。今回は、多くの機関からの後援もいただき、また参加しやすい日程になったことやジュニアリーダーをはじめとする若い人の参加も多かったことなどを反映して、これまでとはひと味もふた味も違った熱い議論が繰り広げられ、大成功のうちに終了しました。

1 名 称 第13回 融合フォーラム 2009 in 神奈川

2 テーマ 「学校と地域のかげ橋は子どもだ！」

・・・大人になっても戻りたくなる学校と地域とは・・・

3 主 催 学校と地域の融合教育研究会

4 主 管 「融合フォーラム 2009 in 神奈川」実行委員会

5 後 援 神奈川県教育委員会 厚木市 厚木市教育委員会

(申請中) 神奈川県小・中学校校長会 厚木愛甲地区小・中学校校長会

小学館 こども環境学会 社団法人農山漁村文化協会 日本教育新聞社

財団法人全日本社会教育連合会 社団法人日本青年奉仕協会

財団法人さわやか福祉財団 日本セーフティプロモーション学会

日本市民安全学会 警察政策学会

6 協 力 日産自動車(株) 厚木市ジュニアリーダーズクラブ連絡協議会

7 日 程 2009(平成21)年9月20日(日)

8 会 場 日産先進技術開発センター ホール及び会議室(厚木市森の里青山 1-1)

9 内 容

① 9:30～9:50 プロローグ:厚木市ジュニアリーダー他「厚木なりわい節」

② 9:50～10:00 開会:学校と地域の融合教育研究会会長 宮崎 稔、実行委員長 青木 信二

③ 10:00～11:30 基調提案(4分科会の代表事例発表 各20分)

④ 11:30～13:00 昼食 イベント:ホールで音楽演奏と伝統芸の公演

※希望者による日産社屋見学

⑤ 13:00～14:30 分科会(4分科会で、残り2本の事例発表と3事例を対象に研究協議)

- ⑥ 14:30～14:45 休憩
- ⑦ 14:45～16:45 シンポジウム
(コーディネーター:矢吹正徳さん パネリスト:各4分科会のコーディネーター)
- ⑧ 16:45～16:50 エピローグ
※懇親会・打ち上げ <17:30～20:00> 参加自由 終了後解散

【フォーラムの全容】

シンポジウム「学校と地域の架け橋は子どもだ」

～大人になっても戻りたくなる学校と地域とは～

■コーディネーター(矢吹)

融合研は学校の先生だけではなく、市民、行政、NPO等多様な人の集まりで、大きなエネルギーがぶつかり合う組織。

今年で13年目。秋津や鹿沼をはじめとする学社融合の先進地域から次第に仲間が広がり、熱い思いを持った者たちが皆手弁当で集まっている。

■分科会報告

【第1分科会】(野澤)協働で学校と地域が変わる

○協働の成果と課題

協働の手応えとして、さまざまな場面で効果は見えているが、課題もある。

課題 おやじの会 メンバー間の意見の相違

子ども教室 スタッフ・メンバーがある所まではいくが広がらない

北海道(江差町) スタッフ不足→中・高校生がスタッフとして活動

学校現場 教師の多忙・ストレス、学力優先を強いられる

教員だけが忙しいのではない。地域の人々も忙しい。パートナーとして共に進んでいくためには、かかわる人自身の楽しみや喜びがないと継続や広がりは望めない。

【第2分科会】(越田)学校と地域の新たな望ましい関係

○分科会内の発表の共通点

- ・実践が子どもの心を大きく動かしている。
- ・継続性がある。
- ・最初の呼びかけは、学校や教育委員会からであったが、その後、住民が主体的に自分たちのものにしていった。
- ・コーディネーターの存在が学校と地域の結び付きを強めていくには極めて重要。
- ・地域側は学校の教育目標をきちんと意識し、学校側は教育計画・活動の中に地域の活動を位置づけているといった、相互の理解がうまくいっている。
- ・パートナーという言葉を使ってボランティア活動を表現している。
- ・地域と学校が同席して話し合い、共通理解する仕掛けづくりがきちんとできている。
- ・今後の継続性という点で、保護者の参加・参画については、積極的な学校と、それをなるべく避けたい学校がある。

◆避けたい理由 子どもたちの個人情報や学校の情報などが漏れることを心配

【第3分科会】(岸)学校と地域の安心・安全

○分科会内での共通点

- ・秋津も清水小のネットワークも共に小学校区
- ・最初のきっかけは、行政や校長からの投げかけ。行政の職員や校長が入れ替わる中で、その後、地域側が主体的に受けとめ、取り組むようになった。

○厚木市 セーフコミュニティ認証に向けて

- ・平成14年から防犯に力を入れたところ、平成13年ピーク時から現在、犯罪は激減。しかし、市民の不安は全て解消できているわけではない(心がもう一歩)。そこで、認証に向けてセーフコミュニティ担当部を創設。
- ・市民が活性化していくことにより、不安を解消させることが出来ることの理解を促していく。「安全活力」(安全と活力は矛盾しない)というキーワードと符合。
- ・現状における課題
自殺者、自転車事故の増加。加害者を生まないためにはどうすればよいか。
自転車事故では、青少年も加害者になっている。青少年の健全育成という視点で、加害者にならないように育むことが必要。

○行政ができることと市民ができることのすみ分け

- 清水小の事例の駆け込みポイントでは、ステッカーを貼ることにより、市の保険の対象となった。秋津でも腕章をつけることで、保険の対象となる。行政ができることを明確にして活動を支えることが重要。

【第4分科会】(渡辺)中学生が学校と地域のかけ橋に

○中学生に焦点を当てた発表(今まで初めて)

- ・学校と地域がつながることで、中学生が、地域が、大人が変わる。
- ・北海道におけるキャリア教育・・・体験場所が少ない。中学生の発達段階や授業の目的等考えたときに、地域からかかわることは難しい。中学生が地域の大人から学ぶとともに、地域の大人も中学生から学ぶといった、お互いの学びが豊かな学びにつながる。
- ・確かな学力の形成には学社融合は効果的である。

○今後の学社融合に向けて

- ・学社融合について、話し合いの場を作る必要がある。
- ・学校と地域、企業などさまざまな融合の形が進んでいく中で、コーディネーターの存在が重要である。

■コーディネーター(宮崎)

○協働の手応え あるのか？質はどうか？

- 子守になっていないか。大人たちが用意した所に子どもたちがやってきて、依頼心の強い子どもたちにしてしまっていないか。

○子どもたちがかけ橋といっているが・・・

- 子どもたちはメンバーであり、その上でのかけ橋となっていくという認識が大事。
ミニ佐倉の実践では、子どもが作るまちであり、あくまでも子どもが主体であった。

○加害者を出さないということ・・・

- 犯罪や事故の件数が減るということと子どもたちの心が育つということの両面を考える必要がある。養護と同時に育てていくことの二面性。
子どもがフリーになれる時間がない現状。どこでも大人の目があり、どこでたくましく育つのか。下校中に事故はないかもしれないが、道草も食えない。

○大人がこんなふうに変ったという話はよく聞くが・・・

- 子どもたちはどう変ったのかということを話題にしてほしい。

○継続性について

- 形骸化して継続していないか。どのようにすれば形骸化しないか。新しいものをどのようにして入れていくか。

■コーディネーター(矢吹)

【協働の手応えは？今の「協働」本当にこれでいいの？】

- ◆越田 学校と地域が互いに主体性をもち、意見をすりあわせ、一つの目的を協働で行うといった状況は進んできていると感じる。
島根の事例 学校と地域の成熟した関係
学校「こういことをしたい」

地域「学校の目的は？」

→目的にあう活動のコーディネート

成熟した理由 学社融合の考えがゆきわたってきた。また、ふるさと教育を行っていく上で、協働によって、どう地域のもの、子ども、地域の人をつなげていくかということを考えていた前提があった。

- ◆渡辺 学社融合には学校教育を進めていく上での危険性もはらんでいる。ケースバイケースで連携と融合を組み合わせていくことが必要。
学び方を学ばせようとするときなど、地域の方(講師)の誠意が、子どもの学習にとって裏目に出ることもある。即、融合できることもあるが、限られた時間の中で、上手くやろうとするのは結構難しい。連携と融合のあり方を考える必要がある。
- ◆岸 なぜ、学社融合は進まないのか？→効果が(客観的に)はっきり見えないから
勉強して学力が上がれば、数値として見えるが、学社融合を進めていって、自尊感情やコミュニケーション能力の向上などの効果は目に見えない。いかに高まったか、学問として目に見える形で証明していく(エビデンス)時期に来ている。
幼少期にどれだけ多くの人と触れ合えるか、ということが人間形成に大きな影響を及ぼす。学社融合が進めば、地域全体が大家族ようになる。
- ◆渡辺 学習状況調査の分析の中で、学力を上げることと学校・地域がつながることとの関係を提示した
ものとして、仙台市の例があげられる。放課後子ども教室を行ったことで、子どもがどのような力をつけ、大人が、地域がどう変わったかということグラフ等の目に見える形で示したことは説得力があった。
- ◆島根の事例 小学校の校内研でのこと。今までは、学校側の連絡調整の負担感などが大きかったが、コーディネーターを配属したことによって、研修会后、こんなことはできますか、とコーディネーターのもとに駆け寄る姿が見られた。担任一人で、校外学習に出かける場合など、コーディネーターに相談して、地域の人との協力を得ることができ、安全で充実した校外学習ができた。

■コーディネーター(矢吹)

【学社融合と学力との関係は】

- ◆野澤 数値ではかれる学力が本当の学力か。
子どもたちの心と身体が育っていることと学力とは関連する。学力向上の下支えには学社融合は欠かせないことであり、協働の仕掛けづくりが必要である。
- ◆越田 地域と学校の結び付き度と学力に関わるデータは島根や和歌山などである。
効果はあるが、データからだけでは人は動かない。感性、感覚的な喜び、わくわく感、感動などの人と人との結び付きによるところが大きい。
- ◆宮崎 学力は生きる力の一部でしかない。しかし、それにばかり目がいってしまう。
島根県海士町で、学校支援地域本部事業として体験型のふるさと検定を実施したいと考えている。
学校の授業に関わるかどうかというより、生涯学習に還元できるかどうかという視点で考えることが大切。食べられる野草を見つけたり、貝を捕ったりなど、体験的な要素を取り入れることにより、自ずと地域の人々との関わりができ、その成果も見えてくれると思う。
- ◆野澤 仙台市 生き方教育におけるキャリア教育での事例
キャリア教育体験後のアンケートでは、予想に反して、「もっとちゃんと勉強しなければ」という感想が最も多かった。教師や家族以外のいろいろな立場の人々との出会いや関わりから、子どもたちは考え、学ぶ意欲を高めている。
学校支援地域本部という呼称 学校が地域に支援されて当然の存在ということではない。
 - ◆渡邊(北光クラブ) 大人が周りの人々に支えられながら、心豊かに生活している姿を子どもたちに見せること大切。地域の大人が学校を支えていくものではない。しかし、学校の現場に入らなくてはわからないこともたくさんある。そのつなぎ手になりたいと思っている。

■コーディネーター(矢吹)

【中学生は地域の中の主体者になり得るのか】【学社融合の手法は効果的なのか】

◆渡辺 災害時などは大きな戦力になる。

中学生が役割をもって地域行事に参加することで、地域に役立とうという意欲を高める。公民館でも、地域に役立つことをしようという取り組みの中で、災害時に備え、中学生が無線の免許を取得した事例もある。大人へと自立する準備の機会を作ることは大切だと考える。

◆学校で、体育祭や文化祭など子どもの主体的な意見を採用入れる際は、職員会議にも子どもたちを参加させたこともある。大人扱いする時間を極力増やした。

公民館事業の「話し方教室」を「美しい日本語」を考える授業に取り入れてみたりした。また、俳句や短歌の授業にも地域の方に入っていたりした。

◆青木 地域で中学生が活動するにあたって・・・地域の方からは、中学生のおもりを地域に委ねるのか、といった批判があったり、参加する中学生も内申点を上げようという理由から活動に加わる子もいたりなど、最初はさまざまな受けとられ方や参加の動機があった。9年間続けてきた今は、小学生の時から中学生が地域行事に参加する姿を見ているので、中学生は自然な受け止め方をしていると思う。実際、テント張りなどは、高齢化が進む中、重要な戦力となっている。現在は、まだ中学生の「参加」にとどまっているが、「参画」にいたらせるには、地域も意識を高めて成長していかないといけない。

もはや、子どもを“育む”というより、地域のパートナーとして大人たちも見ており、活動に取り込んでいこうとしている。

■コーディネーター(矢吹)

【小学生は地域の中の主体者になり得るのか】

◆岸 中学生は主体者となり得るのかという先程の問いも、現に中学生は主体者である。秋津小に視察に来た大人たちを案内する秋津つ子ガイドサークルなど、小学生もさまざまな場面で、その主体者ぶりを発揮している。大人は子どもに自由に遊ぶ環境を作っている一方で、子どもたちをただそこに受け身的に浸からせるだけではなく、自分から行動を起こすことができるように働きかける。子どもたちに関わっていく中で、子どもたちも考えて、自分で行動を起こすようになる。きちんと言うべきことは言っていくことも大切。子どもたちの主体的な参画をめざして、実践し、研修することを繰り返している森の里の取り組みは高く評価できる。ロジャー・ハートの「参画のはしご」の何段目にいるのか現状を把握して、8段目を目指していきたい。

■コーディネーター(矢吹)

【大人の目の届きすぎる現状をどう見ればいいのか】

◆渡辺(北海道) 全校児童16人の小規模校。子どもたち同士で放っておいた方がよいと思われる場面でも、目が行き届きすぎて手を貸してあげたくなくなってしまふ。過保護になってしまうのは、地域の人も同じかもしれない。特に山にある学校では、通学にも時間がかかり、放課後子ども同士で遊ぶ時間が極めて少ない。

■コーディネーター(矢吹)

【子どもの居場所における子どもの主体性について】

◆越田 安全の確保や遊びのリード等、世話する大人の存在は必要だろう。ただし、世話のしかたは考えなくてはいけない。現状として、子供を預かる環境が整いつつある中で心配なのは、子どもたちの面倒を見るしくみが、保護者から子どもを離させ、保護者の他者依存が強まっていくことにつながっていくことである。

◆野澤 児童館には、小学校時代に児童館で遊んだことがある中高校生も集まってくる。その中高校生に、自由な発想で遊びを企画させると、おもしろい取り組みにつながり、そのことによって大人が変わったという事例もある。青年になって児童期に受けた経験が生きてくる。

◆宮崎 文部科学省は、地域子ども教室など事業の成果を確認していない。住民主体の施策となることを会として訴えていくことが大切。

■コーディネーター(矢吹)

【政権交代に関わって、今後の学社融合は】

- ◆岸 教育基本法第3条に生涯学習の理念を定めている。そこから学校教育につながっていることを理解した上で、学校、家庭、地域の連携を踏まえた学習指導の計画をする必要がある。
新学習指導要領では、外国語活動や武道等を教える必要もあり、そのこともあって、あえて学校支援地域本部を設置したのでは。また、新政権では、教員数の増加を進めようとしているが、先生の数が増えたから、地域の人はいらないという発想につながらないようにしなくてはならない。生涯学習社会の中で、Win & Win の考えを生かしていくことが大切である。
- ◆渡辺 事業の成果という点で、必要とされているところに予算がついた場合は継続されるが、無理にやったところは続かない。融合研が展開した事業についても検証が必要。
今、教師はさまざまな能力が要求され、万能でなければ教師になれないような現状で、現場では自主的な研修をかなりしている。教員の免許更新制は見直してほしい。
- ◆越田 地域の自立、学校の自立、親の自立が求められている。教員の数が増えることによって、学社融合のしくみが崩壊するようであれば、理論の理解不足。楽しいからやろうというのが融合研の精神。

■コーディネーター(矢吹)

学社融合の手法をできる範囲で取り入れて、子どもたちがどれだけ変わるのか、先生たちの実感としてとらえてほしい。データよりも実感の方が納得できるはずである。

学校、地域ともに切磋琢磨して、融合を進められるようにしていきたい。

第1分科会「協同で学校と地域が変わる」

コーディネーター:野澤令照さん(融合教育研究会副会長)

発表1:岩手県紫波町 藤尾智子さん

発表2:大阪府羽曳野市立羽曳が丘小 PTA おやじの会 金寄修さん

発表3:北海道枝幸町「遊 YOU 広場」放課後子ども教室 井上典子さん

○ 発表1:『私たちの学校』で、つながりを深める」

大阪府羽曳野市立羽曳が丘小 PTA おやじの会 金寄修さん

◎ 質疑

Q1:それぞれのイベントに参加した人数はどのくらいか？

A1:防災キャンプ—59人、運動会—120~140人、大根収穫祭—60人

Q2:地域の人たちなど、変わってきたという手ごたえは？

A2: ご高齢の方が、大変元気。NPOに所属している人たちの活動が様々で意欲的。

50~60代の方が少なく、イベントの準備等で打ち合わせをしてもなかなかみ合わないことがある。少し時間がかかるかもしれないが、世代間の溝を埋めるよう作業、世代を掘り起こすために親父の会やPTAのOBの人にいかにかに様々な活動に参加してもらえるのか。その仕掛けが大事だと思う。

実際は、地域のところまでは広げられていないのが現状。

○ 発表2:「子ども教室にかかわって」

北海道枝幸町「遊 YOU 広場」放課後子ども教室 井上典子さん

◎ 質疑

Q1:子ども教室は、平日の居場所か。

A1:平日も休日でもある。

Q2:平日は地域の人が必要だが、むずかしい。アプローチはどうしたか。

A2: 6人からスタートした。広がったと思っていたが、そうでもなかった。入ってくる人はいろいろな人がいるが拒まないことは大切。

Q3: 井上さんに事例発表の声をかけたのは、私(宮崎会長)です。最初は固辞されたが、大きなすばらしい実践だけではなく、ささやかだが井上さん自身が変わってきたプロセスが大切で活動の原点である発表であると思う。

Q4: 大和氏から来たフリーのライターである。多くの先生や融合研の岸さんとも話聞いてきたが、ストレスがたまってくる感じがあった。成績というかせられた学校での業績がある。しかし、先生は公務に追われすぎている。子どもと接する時間がない。先生が疲弊している。それでいて成績を上げろといわれる。

そういった中で、こういう運動がどういった効果を出してきたのか。効果は2つあり、一つは、いわゆる成績の数値、もう一つは、先生への有効な手を差し伸べているか。手がかりが見えないのだ。そういったところを今日、話を聞いてどこかで今日の経験を書きたい。

○ 藤尾さん基調発表の補足説明

- ・ 事業をやっていてすべてがうまくいくことはない。コーディネーターがたくさんいる状況は心強い。

○ 協議

野 沢: 活動を広げていく上での、学校が変わった、学校の雰囲気などの手ごたえは。

(金 崙): 親父の会に先生たちは来なくなった。校長が4人かわった。最初の校長は親父の会に理解があった。しかし、替わるごとに変わる。

先生にもそれぞれ地域があるし、そこでがんばってほしいと思ってきたから仕方がない部分もある。うれしさとさびしさがある。

保護者向けの情報誌を作ってきたが先生が結構活用してくれているのはうれしいこと。

(参加者): 厚木で親父の会をやっているが、3年やってきたが、年々盛り上がっている。ボランティアから始まった。PTAの中に位置づけるかどうかは、難しいところ。楽しみながら主体でできなくなってしまう。今は、あくまでサークルの立場にしている。代表のノリは大切な要素。

(参加者): 鎌倉市で親父の会を2年前からやっている。校庭の芝生化を目指しているが、PTAの中で対立している。合意形成が難しい。説明会を開いても集まれない。いい手はないか。

野 澤: まず先生方のおかれている状況について、感じるものはあるか。

(参加者): 福生市から来た。昨年学校に、入ったときに異質なものが入るといふ雰囲気が先生方にあった。

校長先生とは話せるようになって少しずつ変わった。

学校の子どもたちの状況は、厳しいものがある。先生たちも手を焼いている。「ふっさっ子広場」が始まり、そこに来る子が問題を起こしている子ばかりで大変であった。しかし、先生方も取り組みに理解を示してくれるようになり、子どものことで情報交換や飲み会ができるようになった。市からくる方針と現場の状況が合わず、ずれを感じることもありそれが今の悩みである。

野 澤: 先生方が変わってきたという事例の話が合った。これは、先ほどの、学力向上を課せられている教師、上からの教師の責務ということと直接的にはつながっていないようにみえるが、悩みを抱えている子どもを支えることができる教育活動につながる。

(参加者): 千葉から来た高校の教員。中学にいた時期があるが、先生方は本当に大変であった。外からのサポートで先生方を救えないかと思って今日は来た。

中学にいたとき、PTAの方が、土足で入ってくる感じがした。自分が逆の立場になってみようと考えた。ただ、校長の一言は、どちらの立場にとっても大きく影響する。

小学生がよくなれば、中学、高校もよくなるはず。

野 澤: さきほど合意形成の難しさの話が合った。それとからめてメンバーの広がりが見られないという話があったが。

(金 崙): 親父の会は、毎年更新をかけている。多いときは80人くらい。地域デビューの人は、回ごとに半減していく。2,3年目の人がファシリテートしていけるとよい。最初につまずくと合意形成は難しい。

野 澤: 井上さんの話の中に、人が増えてきたとあったが、コツは。

(井 上): ぎりぎりで行っている。何でもいえる校長との関係がある。常日頃から一人から二人、三人へと働きかけが大切。

(藤 尾): 行政とのかかわりについて。市民の方に行政の下請けはいない。あくまでもパートナーである。学校の問題も同じ。学校で子どもを育てるパートナーであり、いいことは言える状況にしておかないといけない。上下関係が出てしまう。

さきほどの教科の問題にもかかわる。成績は評価でない。成績はもともと目的がきちんと共有化されてはじめてそれを達成したとき評価が成り立つ。

行政と市民の間に中間支援をおいている。直接ぶつけるとうまくいかないものも出てくる。学校と地域も同じか。

野 澤:最後に一言ずつ。

(井 上):エネルギーは人からの言葉です。

(金 寄):うれしいことがあった。親父の会に、中学校の女性教諭が入った。いいことを励みにしたい。

(藤 尾):市民の声がうれしい。ゴーンの好きな言葉「変化するものだけが生き残る。(ダーウィン)」。

第2分科会「これが学校支援地域本部だ！」

コーディネーター:越田幸洋さん(栃木県鹿沼市・学社融合研究所)

<発表>

事例発表1:「たくさんの出逢いの中から感じた思いを伝え、繋ぎ、遺し、学び続けるために」
～今、北光クラブができること～

栃木県鹿沼市北光クラブ 渡邊 真知子さん<全体会で発表>

事例発表2:地域との協働による学校づくりをめざして

地域協力者の支援を活かした学習活動の充実

神奈川県厚木市立毛利台小学校パートナー委員会 奥田 七代さん

事例発表3:津和野町“学びの協働”推進事業～子どもと大人の素敵な出逢い～

島根県津和野町 元地域コーディネーター 澤江 健さん

<意見交換>

越田:みなさんの実践から、人の結びつきから生み出されている「感動」というのがあるような気がします。

子どもが感動したこととか大人が感動したとこととか、もうちょっと具体的にお話ください。

澤江:研修会后に、玄関先でコーディネーターと私に、研修会に参加した先生が「待ってください！こんなことがしたいんですけど！」と猛ダッシュで来ました。きっと先生は、「したかったことができるようになった」と強く思われたんだと思います。先生が走って追いかけてくる姿が感動的で忘れられません。

奥田:戦争体験のお話を、地元の高齢者の団体をお願いするのですが、話すことに慣れていないことから「え、子どもの前でお話をするの？」となってしまうのですね。座談会形式に変えていただけないかと学校とお話をし、最近、グループの中に高齢者の方が入って、子どもたちと一緒に話をしながら戦争のことについて語り合っています。

越田:毛利台小学校の実践を全国的に有名にしたのは、今日みなさんが来ているこの日産のスタッフと毛利台小学校の当時の5年生の先生が共同研究された、「未来の車を作る」実践なんですね。

代表の子が校長室に呼ばれ、校長先生から「未来の車を作れ」の「指令書」を受け取るんですね。この演出を地域と先生方がやっていったわけです。もうその感動から授業がスタートしているわけです。

渡邊:PTAが対応しきれなかった、教室の汚れたカーテンの話をサークル活動の家庭クラブに全面的にお願いしました。教務の先生から、「子どもたちが教室の中がせっけんのいい匂いがすると言っている。保護者のみなさんに洗ってもらったから、クリーニング屋さんにもやってもらったのでは言えない言葉だと思います。ありがたかったです。」と言葉をかけてもらったときにやってよかったなと思いました。

越田:せっけんの匂いという話がありましたが、そこにご自身が感動するから、みんなに同じ体験をさせてあげたいという気持ちがあるのかなと感じます。コーディネーターというのは、そういうものだと思います。

す。

さて、ご質問があればここで解決しておきたいと思いますが、いかがですか？

○(秦野市から来ました。):厚木市教育委員会は、学社融合にどのような姿勢を持っているのでしょうか？

越田:毛利台のような学校と地域が連携する研究指定というものはあるのですか？

中川(厚木市立第二小学校):毛利台小が地域指定されたことと、学校教育と社会教育と両方をやっていく必要があるのではないかとということで、教育研究所に社会教育主事兼指導主事という立場が位置づけられたということがあります。社会教育の立場で学校に入れる体制作りをしてくれました。

○(横須賀の小学校から来ました。):本校では地域連携に取組み3年目になります。継続するための組織作りが大事と思っています。パートナー委員会の構成メンバーや任期、規約がどのようになっているのか、また携わる方々の研修や予算的なこともお聞きしたいのですが。

奥田:結論から申しあげると、ありません。それほどきちっとしたものを作ってこなかったから逆に継続しているのかと思います。任期もありません。やりたいときにやり、できなくなったときに抜けるのではなく、一時保留にして、名前を残しておくから、何かの時には助けてという形にしてあります。予算化はしておりません。基本的に講師を呼ぶときは、地域の人を呼ぼうということが大前提になっていて、お金を出してよそから講師をお呼びすることは、想定外になっています。

越田:あまり窮屈に決めすぎると息苦しくて続かなくなっちゃうという一つの提案ですね。

渡邊:北光クラブには会則があります。健全育成連絡市民会議の助成金などをいただきながら活動しているので決算書が必要になります。役員の任期は1年です。再任は妨げないということにしています。ものごとを継続していくためには、最初に立ち上げた人たちの思いをきちんとつなげられるまで、私たちがやっていかななくてはならないという思いから、自分が笑顔でがんばれる間は活動していきたいと思っています。

澤江:仲間を増やしていくことが一つじゃないかなと思っています。2年間学社融合の指定を受けて研究をしていたときに、地域で集まる会議を年間3回程度やるのですが、その会に会則もありませんし、構成メンバーも決まっていません。10年以上たった今もその集まりは続いていて、子どもたちのいろいろな活動について考える場になっています。

越田:3つに共通していますのは、保護者を含めて地域の方が主体的に動くような工夫がなされているということだと思います。これからは、学校を中心に実践されてきたものから、地域側の主体性を作って、組織化して継続化を図るのが方向なのかなと感じます。

○(毛利台小学校の校長です。):感謝の気持ちというか支援してくれる方に「ありがたい」ということです。それは事あるごとに学校だよりやPTAの会議などいろいろな場で発信しています。

実は、2年生の図工の話があったのですが、来てくださっているのは奥田さんの娘さんなのです。「学校行って楽しかったよ、子どもが声をかけてくれたよ。」という話を家でしてくださっているということです。そのような気持ちを大事にしたいなという思いです。

越田:先生方が、関わってくれる方々へ「ありがたい」だけじゃなくて「子どもがこんなに変わったよ」とか「先生方がこんなことがとても助かっているよ」とか具体的におっしゃっていただいていること、それが地域にとっては先生方からの信頼とか、依存とか自分の存在感とかを感じるものになるのですね。それが、学校ができる継続性への配慮だと思うのですね。

加藤(毛利台小):昨年の3月に学校に関わってくださった方が一堂に会して懇親会を設けたのですが、それはやはりみなさんの今後のエネルギーになったし、私たちの感謝の気持ちを表す機会にもなりました。

越田:まさにこういう仕組みを作って、お互い交換できるようなものがあるといいですよということですね。

地域の方々の教育への参加に関して、研修など何か仕組みを作っておられるかについていかがですか。

渡邊:4月の下旬に北光クラブを活用していただくために、説明会を新任の先生方といっしょに行います。

秋には健全育成連絡市民会議と先生方と合同の研修会を行っています。同じ時間を持つことで、先生方、地域がそれぞれが今大変なこと、そこから自分たちが何ができるかを考えるための研修です。継続して13年になるのですが、今は学校の先生も地域の方も、自分たちができることを探してください。

また、ゲストティーチャーの方たちにはとても思いがあって、例えば先生が、15分だけゲストティーチャーの方のお話を聞きたいと思っても、思いが先に立って30分になってしまう場合があるんです

ね。そういうことをやると、先生方はそこで疲れてしまうんです。それがないようにするために、北光クラブと先生とゲストティーチャーと3者で打ち合わせをすることにしています。ゲストティーチャーが言えないこと、先生方がゲストティーチャーに言いにくいことをきちんと私たちが伝えるためにそこにいるという意識を持って打ち合わせをさせていただいています。先生方にとっては、ゲストティーチャーに来ていただいて自分が思うような授業ができたという充実感がなければ、次に使おうとは思わないから、その部分をうまくコーディネートするようにしています。

越田：北光クラブについては、いろんな意味で創意工夫と仕組みが打たれていますね、長い活動の歴史が生み出してきた成果だと思うのですが、それは地域側で思いがあって成り立ってきたことなんですね。学校が仕掛けていたら、どこかで途絶えて終わってしまっていたかもしれません。

それでは、せっかくおいでいただいたのですからみなさんの関わっておられる実践などを、お話しただけようお願いします。

大谷(大阪河内長野市美加の台中学校区学校支援地域本部コーディネーター)：まだ1年満たないところですが、学校の先生方の必要な部分をお聞きして、今登録している地域の60名くらいの方に、このようなご協力をしていただけてませんかということにつながらせていただいています。そして、終わりましたら先生方からもボランティアの方からも振り返りの言葉をいただくというようにして、また次につながることをしています。一番うれしかったのは、一つの登録だった方が「もっとできるよ、やったら楽しかったよ」とか、「絶対次も行きたいから声をかけてください」と言ってくださることです。地域にいろんな組織ができていますし、いろんな行事がある中で地域本部なので、子どものために、先生のために、地域みんなのために、みんなの笑顔が増えるような地域にするために、それらをつなぐにはどうしたらいいのか、今検討しているところです。

○(民間のNPOの教育支援協会から来ました。)行政と学校の間に入りNPOがコーディネートをしています。今、横浜市の小学校のコーディネートをしているのですが、うまく回っておりません。一番大きい悩みは、学習指導の時に学校の先生との折り合いがなかなかうまくいかないことです。保護者は、私がこんなことしていいのか、自分の子どもが学校で違う目で見られたりしないのか、そういう不安を抱えながら参加していただいている状況です。保護者が教科指導にかかわることについて、学校の関係者の方がどうお考えなのかご意見伺えればと思います。

越田：学校の先生方でどなたかご意見があれば言っていただけますか？

熱海(厚木市立第二小学校)：最初のころは、「だれだれのかーちゃん来てるよ」などと子どもの中で話題になったりするのですけれど、最初だけで、やはり慣れてしまえば教師と同じように頼りにもせずし、はじめのきっかけをうまくすれば、子どものほうには違和感はないのかなと思います。

○(千葉県松戸市立六実小学校)：福祉教育の県の指定を受けて去年から3年間研究しております。日ごろから学校を支えてくださってくださっている人たちに、感謝の気持ちを表すことが大事かなと最初は思っていたのですが、実際にスクールガードさんに来てもらい子どもたちと一緒に遊ぶというのをやったのですが、逆に楽しくて感謝されたということがあったんですね。今日すごく勉強になったのは、今日のキーワードになっている、コーディネーターがいらっしゃるということですね。学校から発信するだけでなく、コーディネーターの方が両方の話を聞いてうまくセッティングして下さって進んでいるというのが、長く続いていくためにものすごく大事なんだなと、地域に帰ってその辺を考えてつなげていけたらなと思いました。

越田：保護者の教育への参画について、先生以外の方からもご意見をいただきたいですが。

大谷：社会見学に行くときなどに学校から、子どもさんの個人情報があるので保護者のボランティアははずしてくださいと言われました。でもそうすると層が薄くなるんです。年配の方は長距離歩くのがしんどいというのもあると思うし、その辺はどうしたらよいのかなあと、なぜにそこまで拒まれるのかなと思うこともあります。

渡邊：北光クラブでは学校に親が関わることを、全面的に協力してもらおうような形をとっています。今の子どもの実態を知らないと、自分の子どもをどう教育していいかわからない。すべて人任せの状態になってしまうということを保護者にきちんと伝えていかなければいけないと思っているからなんですね。

奥田：うちの学校では、英語の授業では、自分の子どものクラスではない授業に先生として入っています。だれだれの親だからということより、自分が持っている技術を伝えられる喜びが聞かれることがあります。また大工さんのおじいちゃんが、工作ののこぎりの使い方の授業で、目立から教えてくださり、大変プラスになっています。先生方の思いもあるでしょうが、保護者の思いもあります。

澤江：津和野も積極的に保護者を巻き込もうとしています。中身にもよるのではじゃないかと思いますが、積極的に話してくれる保護者に、周りの子は、何々ちゃんのお父さんすごいねと言うし、言われた子ども大喜びでお父さんまた来てねという感じです。引率の時にも保護者の方に入ってもらっていますし、算数では、丸付けボランティアなどに入ってもらったりしていますが、今までプライバシーがどうこうということはなく、そんなに違和感なくやっています。

越田：九州の春日市立西小学校では、教室に5, 6人がどっと机を並べて座っているんですね。子どもたちはプリントが終わると、並んでいる方々のところへ持って行って丸をつけてもらうんです。間違ったら「先生のところへ行っておいで」「よくできたね」「もっとがんばんな」って言われるんですね。年齢層を見るとほぼ保護者なんです。丸つけのレベルでも西小学校は保護者なんです。それは、ちゃんと校長先生の意図があるのです。親を変えなければ子どもは変わらない。親を変えるには子どもの教育に直接触れてもらう。

それが今必要なんだとお考えなのだと、僕は推察しています。みんなが関わっていくことが子どもにとってプラスなのです。そこを、親だからなんだからと分けすることに何か課題があるのかもしれない。

ただ、合意を得られないものにはあえて手をつけない。合意を得られたものから保護者も関わってもらう。それで一番物事は進むんですね。もうひとつは、心配しているよりはやってみることだと思います。やってみて課題が多いねということならやめればいいだけのことです。

最後に、

北光クラブさんの発表からは、やはり活動の全体を見ながら、組み立てをしっかりと作っていく。地域は地域として自分たちができることをやっていくんだと、そのためにはどういう仕組みを作っていくのかということが、構想として常に持たれて、その方向に向いていくことが大事なのかなと思いました。

毛利台小さんの発表の中で、学校の研究構想図が入っています。学校の中に、パートナー委員会がきちっと位置づけられているんですね。これは、もう学校として取り組んでいかなければいけない。協働する立場としての両者なので、学校は学校の計画の中に、地域の委員会、活動を位置づけていくことだと思うんです。奥田さんの発表聞いてすごいなと思ったのは、学校の教育目標から始まったでしょ。ちゃんと学校と課題を共有化しているわけです。これは地域としてすごいなと思うんです。

津和野の発表は教育委員会として、国がやるから、県がやるからではなくて、それを津和野としての独自の教育の組み立てをして、構想を練り直している。むしろ国や県のものを利用して、地域の中の教育を構想して展開し、それがうまくいった例だと思うんです。

3つどれも共通しているのが、コーディネーターなんですね。コーディネートという機能を持つかもたないかという差が大きいと思います。

最後になりましたが、今日の話は核にあるのは授業なのです。三者の方々がどこで結びつきを強めようとしているかという授業という場なのです。それが、この分科会の大きな特色になっているんですね。

これからやはり、核になって大切なのは、授業の中でどうするのかということなのだなと思っています。そんな意味で今日はいい事例を出していただいたと思っています。ありがとうございました。

第3分科会 「学校と地域の安心・安全！」

- ・コーディネーター 岸 裕 司さん
- ・発表者1:厚木市セーフコミュニティ専門委員 石附 弘さん
- ・発表者2:千葉県習志野市 秋津コミ 佐竹正実さん
- ・発表者3:神奈川県厚木市 しみずっ子すこやかネットワーク会議 田口孝男さん

岸さん 会場で配布の大会用冊子 P35(『年報 学社融合 第6号』では P92)より【分科会 コーディネーター提言】の朗読。

終わりは 14 時 30 分ですが、午前中の全体会で石附さんには「似て非なる『セーフコミュニ

ティ』と『安全・安心なまち』、似て非なる『セーフスクール』と『安全・安心な学校』(※詳細は、会場で配布の大会用冊子 P36～、『年報 学社融合 第6号』では P91～)をテーマに発表いただきましたので、先ず発表者2・3に、それぞれ 20 分ずつ発表してもらい、その後、皆さんと討議していきたいと考えています。

それでは、佐竹さんお願いします。

発表者2 学校の安全・地域の安全

○千葉県習志野市 秋津コミュニティ 佐竹正実さんによる発表

※詳細は、会場で配布の大会用冊子 P42～、『年報 学社融合 第6号』では P97～

○パワーポイントを使つての主な発表内容

- ・秋津小学区の紹介－1980年4月にできた小学校です。学区は約1キロ四方程度の広さであり、30年の間に住宅地になった。
- ・学校と地域で共に学ぶ－池田小の事件からの影響を受けた後の学校の看板(P42、年報 P97)の表示であるが、門を閉じてしまう学校が多いなかで、学校と地域の協力をアピールした。
- ・埋め立て地なので伝承すべきものがなかったため、文化を創ろう、ふるさとを創ろうということになった。例えば、秋津まつりでの小学生によるソーラン節などである。
- ・放課後子ども教室での危険マップづくり－子どもたちと共に遊びを通して作成した。現在、継続はできていない。実効性があったのかを検証しなければならない。
- ・登下校の安全支援ボランティア－不審駐車ナンバーチェックをしている。
- ・ママチャリに「防犯運動中」の札をつけての防犯活動
- ・トラックを持ち込んでの交通安全教室の実施－トラックの運転手さんの協力で、子どもたちが運転席から見えるところ見えないところを確認したりしている。
- ・幼稚園の園庭を利用して、お父さんを引っ張り出しての防災訓練－楽しくて、参加しやすい防災訓練を通しての地域の絆づくり。キャンプファイヤーをやったり、パン作りや野外炊飯、さらにはブルーシートとキャビネットトラックでの臨時お風呂の実施
- ・ただ単なる遊びじゃなく、やってみてできないところが見えてくる－小学校の防災倉庫を開けて使ってみようとする、鍵が開かないという事態に出会った。
 - ・住民に、小学校が災害時の避難場所であることを意識づける。
 - ・秋津小のコミュニティルーム設置の呼びかけ。
 - ・植木の選定による可視化による安全化。

○佐竹さんの問題意識

- ・都市化が進んでくると、他からの進入がコミュニティだけで防げるのか(脆弱化)。
- ・被害者にならないことはもちろん、加害者を生み出さない地域づくり。

岸さん 次の発表者の田口さんは、さっき食べたお弁当のとんづけの社長さんでもあります。

発表者3 みんなで守る！ しみずっ子の元気と笑顔

○神奈川県厚木市 しみずっ子すこやかネットワーク会議会長

厚木市立清水小学校PTA会長

田口孝男さんによる発表

※詳細は、会場で配布の大会用冊子 P44～、『年報 学社融合 第6号』では P99～

○パワーポイントを使つての主な発表内容

- ・清水小学区の紹介－厚木市のほぼ中央に位置し、創立は130年以上の伝統をもつ学校であるが、近年は急激な都市化により環境が変化し、不審者の増加などの問題が現れている。
- ・子どもたちの安心と安全を守るため、学校と家庭と地域が一体となった「しみずっ子すこやかネットワーク会議」を設立した。
 - ・ネットワーク会議のメリットは、各団体や組織等の相互の密な連携や、意見交換、さらにはお願いできる。
 - ・ネットワーク会議の全体会は年3回開催している。学校からは教育活動の紹介、家庭や地域からは、それぞれでの様子を発表し合っている。課題解決に向けた協議の結果は、各団体や組織に持ち帰

り具体的な活動に反映していく。

・具体的な活動についての紹介

- ①情報共有ネットワークー電話連絡網ばかりでなく、FAXや携帯・eメール等を活用して迅速な連絡を可能にしている。
- ②登下校の見守り活動ー「愛の目運動」というが、地域の方々が黄色いベストを着て道路に立つことや、交通指導員による交通指導を行っている。
- ③あいさつ運動ー児童が考えた標語を学校だけでなく、地域にも看板として提示してもらっている。挨拶への意識付けとともに、挨拶を通してお互いにより関係を築きあえるように指導している。
- ④かけこみポイントの充実ー全ての子どもたちには、日常的に防犯ブザーを持たせているが、それだけでなく厚木市が保険をかけた「かけこみポイント」の設置について、自治会や子ども会とともに推進している。現在850軒ほどであるが、1000軒を目指して取り組んでいる。また、児童会では、毎年、設置していただいているご家庭に花の種とお礼の手紙を送っている。
- ⑤地域安全マップづくりー地域の中の危険な場所を子どもたちの目線で確認する。
- ⑥安全環境の整備ー発見した危険な場所の改善を、学校と自治会と協働して行政にはたらきかけ改善をしている。
- ⑦安全な自転車運転への啓発・指導ー毎年、「交通安全こども自転車神奈川大会」への参加を通して、子どもたちの意識の向上を図っている。PTA主催での交通安全教室では、しっかりと学んだ子どもに「自転車運転免許」を出している。さらに、自転車用ヘルメットの着用率の向上を目指して取り組んでいるところである。
- ⑧新たな取り組みー国際基準のセーフコミュニティモデル地区として、現在、ワークショップを開催し、地域の様子をあらためて見つめ直しながら、安全な地域づくりへの方策についてを考え合っている。

○田口さんの問題意識

・人が替わっても、現在の取組を継続・発展させ、清水小からセーフコミュニティへと進展させる。

岸さん

ご発表ありがとうございました。それでは討議に入りたいと思いますが。佐竹さんの発表では、最後に課題が2点ありました。

一つは、コミュニティが安全でも、外部から危険が入ってくる可能性あるのではないかということ。これは、どこでもそうですね。例えば、高速道路のインターチェンジができると、必ずその地域の犯罪が増えるということがあります。

もう一つは、加害者を出さない地域にするためには、どうしたらよいかということですね。

一方、田口さんの方のネットワーク会議の活動はすごいのだが、今はセーフコミュニティのモデル地区だそうですが、こうした取組はモデル地区になる前からやっているのですか。

田口さん

そうです。3年前に学校の実情を受けて、当時の小島校長から相談を受けて、安全・安心に絞って始めました。そうして取り組んでいるうちに、今年、セーフコミュニティというものがあって、私たちの考え方と近いところがあるので、やってみようよということになりました。

岸さん

わかりました。さて質疑に移る前に、秋津コミュニティは任意団体だが、小学校の中に4つの教室を借りて、秋津コミュニティ内に運営委員会をつくり、行政から鍵を借りて住民自治で行っている。形の上では、行政から運営を委託されているということになる。こうした活動の安全面での効果には、どのようなことがあるかを調べてみた。

習志野市の警察が発表した資料によれば、習志野市全16小学校区のうちでも犯罪発生率の少ない方から2番目になっている(パワーポイントでグラフを説明)。

地域の人の目があれば、空き巣も含めて犯罪が少ないことから、地域の人が触れあえば触れあうほど犯罪が少なくなるという傾向が一般的に成り立つのではないか。

清水小学校区も、そうした目で調べてみると、犯罪が少ないという結果が現れてくる可能性がある。

我々は、負担感の少ないこと、そして、成果を可視化していくことで次につなげていく気持ちになっていくと考えるような、安全なまちづくりへのセンスが必要である。

秋津は地域ができて30年と新興のまち、清水は136年との明治5年の学制発足以来の伝統校との違い、学区の広さが秋津は最長でも10分以内で登下校できる範囲に対して、清水小学校区は40～50分かかる広さの違い、児童数も約350名に秋津小に対して清水小学校は900名と大きく違うということを確認しておきます。

それでは、発表者1の石附さんの内容も含めて、ご質問のある方どうぞお願いします。

兵庫県の肥後さん

佐竹さんの話の中に、防災訓練の話があったが、私が住んでいる三田市のニュータウンでは防災意識が低いと感じている。今のお話で小学校を中心にやっているところが興味深いのです。高齢者の方の参加を含め、地域の方々のようすをお聞きしたい。

佐竹さん

高齢者、一人住まい、障害のある方といったいわゆる災害弱者といわれる方がおいでになるが、個人情報の問題もあり、気になっているが日常的に把握することができず、課題であると認識している。

肥後さん

地域の防災訓練はやっているのですね。

佐竹さん

やってはいるが、なかなか参加者が増えないという現実はある。

石附さん

春日井市では、関係者があつまって地図上で考え合うといったことをおこなっており、実際のときにも大いに役立つと思われる。

小学校を見にいくと夜間に校門の鍵がかかっており、誰が開けるのかということの課題が見えてきた。

肥後さん

自分の地区では、訓練がなく、防災意識が低いのかなと思っている。

佐竹さん

防災意識が高いとか、低いとかというよりは、具体的に色々なものが見えるのかどうかという辺りから動いている。

岸さん

1995年1月に阪神淡路大震災が発生したので、習志野市の動きが変わった。学校に防災倉庫を設置するようになった。

秋津小学校コミュニティルームの開設は、その年の9月だったので、地域の防災状況をみていた時期だった。そしたら、当時の宮崎校長のキャンプをして人のつながりを深めようとの発案があり、阪神の経験をもとにした防災訓練とキャンプを融合してはじめた経緯がある。

秋津には、賃貸や自宅などの地域により7つの自治会・管理組合などの自主組織に分かれており、プライバシーの問題もあるが、高齢者や支援が必要な方については情報を集め、個人情報であるので金庫に入れていざのときにしかるべく対応するようにしている組織もある。

宮崎会長さん

私はもともと防災について関心があったわけではなく、小学校に併設の幼稚園に父親が送り迎えにきてもそのまますぐに帰ってしまう。そういう人たちを何とかできないのかなと思って、色々考えた。

また、阪神淡路大震災の長田区の避難所になった学校の裏の学校日誌を読む機会があった。住民

は校舎のガラスを割って入り、凍えている、遅れてきた弱者が守られない。仲のよかったコミュニティが崩壊していくようすがわかってきた。そういうことが起こり得るんだということがわかったので、岸さんたちが防災訓練とキャンプを融合させた。

鎌倉市 波多(はた)さん

田口さんに質問です。私も小学校の PTA 会長をやっているが、地区の中学校では地域懇談会を年1回やるけれど、ほとんど自己紹介で終わってしまう。

1年に3回もできるためには、どんなふうに立ち上げたのか。どんな風に日程を決定しているのか。また、メンバーへの情報発信をする場合、電話連絡網をつくるのも大変な部分があるとともに、何か事案が生じた場合、教頭先生などが子どもの方に対応すると学校から発信できないのではないのか。

田口さん

先ず立ち上げの1年目は、やはりそれぞれの意見の発表だけで1回で終わってしまった。2年目には、そのことを受け、学校からでも保護者からでもなく、地域などから提案が出るように、発言者や時間配分を考えるなど当時の土屋教頭と相談して仕掛けた。

案内状を出しても、必ずしも全員出席してもらえないわけではないが、もともと私は交通指導員として地域で活動していたので、個別に協力をお願いしたり、いきなり会議をするのではなく根回しをしたりした。

二番目の、連絡網については、最初、電話でやっていたが、どこかで途切れたりとか内容が変わって伝わるとかあまり機能しなかった。そこで、皆さんにどんな手段がいいかを聞いて、皆さんの希望する方法で、FAX や電子メールも使うようになった。

三番目として、具体的な事案があるときには、教頭から私に連絡があり、そこで連絡網を流すか流さないかを判断して、学校名ではなく会長名で発信している。

あくまで、学校ではなくPTA主体となって行うことが大切で、最初は大変だったが、今はごく自然に行われており、流れができれば続く人が現れると思っている。

岸さん

今の話には大切なことが込められている。行政や学校が発信元であると、人が変わってしまうとだめになっていくことが多い。やはり地域が主体となってやらなくてはだめである。だから、住民サイドに立ったスケジュールを考える必要がある。

また、行政の方も、何年後かに手を離すのであるから、その時を見越してやってもらうようにはっきり言っておかないと、負担感ばかり残ることになる。

地域のが新しいことを受けると、ほかの組織と重複している人が多いので、行政や学校がよく考え、気を付けたいところだと思う。

秋津も清水も、両方とも成功し続けている秘訣は、住民がしっかりと受け止めていること、主体者になっているところである。

会場に、最初に発信された清水小の元校長先生である小島富司さんがせっかくおいでになるということですので、発信なさったときのお気持ちをお話したい。

大変素晴らしいことですが、ここまで成長すると思ってなかったじゃありませんか。いや冗談ですが(笑い)。

小島さん

もともとしっかりとした地域でありましたが、種をまいてきたことが3年たって、形も内容もできあがったなと感じている。現校長など皆さんのチームワークでここまできたなと実感している。

なぜ、立ち上げたかったのかというと、地域から色々な皆さんから要望が入ってくる、一方では、学校から地域の皆さんにお願いしたい事柄もあるわけだが、どうもかみ合わない。また職員室内の職員の和を一つにつなげたいとも思った。

一方、中学校では、地域の青少年育成と非行防止のネットワークを持っているのに、なんとか小学校でもできないものか、中学校のネットワークと小学校のネットワークが補集合のように一部重なっていても良いのではないかと思い、小学校のネットワークをつくった。

1年目は上手く運ばない部分もあったが、田口会長という力のある人を得て、大きく進んだと思う。学校とPTAの指導者が上手くマッチングすることも重要なことであると思う。
そして、お互いに色々なことを言える関係を築くことが大切であると思う。
それから、実は、以前から自分の頭の中には秋津の取組がイメージにあった。

岸さん

どうもありがとうございます。今は現職の校長さんですか。

小島さん

いいえ、自分の地域で自治会長をやっています。

岸さん

今度は地域のおじさんとしてネットワークづくりにがんばっておられるのですね。

小島さん

やっております。

岸さん

残り5分になりましたが、厚木市でセーフコミュニティを進めているという話が石附さんからありましたが、行政内にセーフコミュニティの部署をつくり、その次長をなさっている 倉持さんがおいでになるということですので、行政としての受け止めかたをお話ください。

倉持次長さん

厚木市では、平成14年から防犯に力入れ、黄色いベストもつくり取り組んできて、平成13年をピークに犯罪は半分くらいに減ってきたが、市民の「心づくり」を忘れていた。市民には不安感が残ってしまっていた。昨年からはセーフコミュニティの取組を始め、市民の体感治安の向上を目指している。昨年10月にアンケートをとってみると、地域の活動が活発なところほど不安感の感じ方が少ないということが結果からわかった。市民のコミュニティにおける信頼感を取り戻すことが、犯罪に対する不安感を減らすことになるのではないかと考えて、セーフコミュニティの国際基準の認証に向けて取り組んでいる。

地域の絆を取り戻すことで、安心・安全なまちづくりを進める意味でも、厚木市が日本で初めて、セーフコミュニティ担当部署をつくり、来年の認証取得に向けて頑張っているところです。

なお、詳しいことは、11月に開催されます日本市民安全学会主催の「市民安全安心フェスタ横浜」で発表いたします(チラシを配布)。

岸さん

補足があれば他の人どうぞ

平野担当課長さん

自転車事故や自殺の増加など、厚木市のが課題である。また、佐竹さんがおっしゃったように、加害者を生まないまちにしなければならないと思っている。

石附さん

犯罪者を出さないことが究極の安心・安全だということです。私は、秋津がなぜ犯罪が少ないのかを知りたくて訪れた。犯罪がないのでパトカーもいない、警察もいかなないので、何をしているのかわからないので、知りたくて訪れた。

秋津の場合は、非行少年や不登校もいなくて、表情が豊か、表情筋もしっかり発達しているということです。

色々なタイプの大人にふれあうことで、心のセンスが育まれるし、色々な人との会話が広がり、子どもたちの社会性が育っている。

岸さん

池田小事件以来、学校は閉じる方向へ進んでいて、ハード面ばかりにお金をかけている。例えば、防犯カメラをつけても見ている人がいないのに行政は設置を行っている。
地域の人々が学校を地域の一部とみなし、みんなで子どもを見て育てていく必要がある。
我が子が健全に育つためには、隣の子も健全じゃなくてはいけないんだという、責任ある大人が我々なのだという自覚と活動が、今日の発表である。
安全だけが独立してあるわけではなくて、活力あることとともに、創っていくということがセーフコミュニティとして、これからはなさっていくことなのだろうと思う。

石附さん

佐竹さんの紹介してくれた学校の看板から何を学ぶか。「割れ窓理論(割れた窓があると、もっと割りたくなる悪い心を抱く人の心理)」ではなく、「灰皿理論(灰皿があれば、タバコを吸ってもよい合図。しかし、灰皿を置いていないのに吸おうとするおもんぱかりの足りない人の心理)」で意思表示をしっかりとる、ルールを確認し合うことが大切なのである。

岸さん

それでは、最後に発表者のお二人、それぞれ一言ずつどうぞお願いします。

佐竹さん

人間関係というか、絆が大切であるので、つながっていける仕掛けをしっかりとつくっていきたいと思っています。

田口さん

設立当時の皆さんにきてもらってときどきしましたけど、これからも疲れない程度に、そして一人ではなく、みんなでやれるように考えて行きたいと思っています。

岸さん

最後までありがとうございました。みなさんが、それぞれの場所に戻られて、今日の話合いが少しでも生きるのであれば幸いです。ありがとうございました。

第4分科会「中学生がかけ橋で地域が変わる」

●コーディネーター 渡辺 喜久

私自身の学社融合は、鹿沼市の越田さんの「一つの言葉」から始まった。

「生涯学習を推進するために唯一具体的に出てきた手立ては、学社融合である」

学社融合を進めていけば、生涯学習そのものも進めていくことができるのではないかという思いでやってきた。その後、中学校における学社融合の実践例をできる限り発掘・実践

本分科会は、学社融合の大会が始まって初めての中学生だけに焦点を当てた

●事例発表 地域と連携した体験学習～中学生 経済・起業体験プログラム～

富士宮市立井之頭中学校 篠原信良

○学校について

* 学区：朝霧高原 市街地から離れ不便 人口減少・少子高齢化 生徒数 150人以上→30名

* 校地：7ヘクタール 5ヘクタールの学校林「希望の森」を生かした教育活動

* 学校教育目標：「美しく 賢く そしてたくましく」

～郷土を愛し、美しく賢くたくましく生きる生徒の育成～

めざす生徒像 志を高く、夢と情熱を持ち、勉学に励む生徒
自ら気づき、考え、判断し、実践できる生徒
思いやりと責任感があり、素直で心豊かな生徒
郷土を愛し誇りを持って生活する生徒

- * 生徒の実態・素直で純朴な一方、少人数のため、競い合い磨きあい、高め合う場面や刺激に乏しい。
 - ・自ら解決しようせず、教師や仲間の助力を待つ姿勢がある。
 - ・生活体験の不足から思考、発想や理論性、表現力、コミュニケーション能力の不足が目立つ。
 - ・市街地から遠く離れているため、生徒自身が主体的に外との関わりや、つながりを持ちたり感じたりすることが難しい。

○経済金融起業体験プログラム(平成19年度～)静岡県金融広報委員会の委嘱(2年間)

経済起業体験プログラム(平成18年度～)を引き継ぎ、富士宮市のフードバレー構想の一環としてスタート。

- ・フードバレー構想の一環として: 自然環境と湧水に育まれた豊富な食材を生かし、地域の食材のブランド化、食と農の人材育成に力を注ぎ、食の街としての環境を整えることを目指す。
- ・総合的な学習として: 「富士山学習パート2」スローガン「富士山を心に生きる子、知りたいことを共に学ぶ旅」ねらい…郷土に誇りを持ち、郷土を愛する子を育てる。自ら学び続ける子を育てる。
- ・金融教育として: 家庭や社会生活における消費、経済、金融、貯蓄、労働等の活動や働きについて、基礎的な知識を身につけるとともに、お金の役割や働くことの意味、望ましい消費生活や自己の将来設計について自らの課題として考えようとする意欲と能力、態度を養う。→自立する力の育成と社会と関わる力の育成

* 活動を通してつきたい力

- ・活動進めていくうえでの課題や考慮すべき点に気付く力
- ・既知の事柄を生かしたり、アイデアを生み出していく、追及、活用する力
- ・よりよいものを求めて意見を出し合ったり、地域にアピールしていく、表現する力
- ・経済活動の疑似体験を通して、自分と社会を見つめる力

* 具体的な活動

①課題づくり 会社組織の編成 主力商品…朝霧そば、特産のヨーグルトを使った豚汁
株主…趣旨に賛同していただいた地元企業6社

個人課題の設定 所属部署に応じて設定 例: 広報部…お客様の立場に立って望ましいチラシ、ポスター、広告を考える

組織別課題の集約 会社全体や部署ごとに会議を開き、個人課題を集約しながら、会社のキャッチフレーズやアピールポイントなどを明らかにする

→会社のマスタープランを決定

→開業計画書作成 道の駅「朝霧高原」での市場調査などを元に

株主総会で、経営計画を発表 ←銀行の方の指導助言・日本銀行本店や東京証券取引所を見学

②追及、実践的活動の段階

- ・商品の調達…野菜の栽培、地元業者に発注
 - ・広報関係…地元スタジオを構える写真家を講師に招き、指導を受ける
 - ・価格設定や接客姿勢について…道の駅「朝霧高原」の支配人から厳しく指導を受ける。
 - ・店舗設計、労働シフト表を作成
 - ・来客にアンケート…教育活動に対する意見や生徒の振り返りのポイントとする。
- ・収支決算…売り上げの状況について、商品選択や価格、販売方法の妥当性について検討

- 利益…配当、備品購入、募金、給与(親子で考えて、使途報告の提出を義務付)
- ・活動の振り返り…市内や校内の発表。関係者へのお礼状や出資者への配当

○成果と課題

- ・表現力・追及する力:仕入れ先との交渉や広報活動を通して、自分たちの思いを伝え実現していく過程
- ・気付く力:一つの商品について、売り手と買い手、外部業者との関係など多面的なことに考えが及ばなく、教師の助言に頼る場面
- ・活用する力:自分たちが動ききれない時の対応や収支計算、経営を練り直す際の会議などでは、既習体験を応用できず、考えが広がらないことがあり、まだ不十分な状態

○生徒の感想から 自分と社会を見つめる力について自分たちの生活がどのようにして成り立っているかやお金の大切さや働くことの苦勞、喜びを感じていることがうかがえ、活動を通して望ましい勤勞観が育ってきている。

●事例発表 地域とともに歩む学校～「仙台自分づくり教育」を通じて～

仙台市教育委員会 庄子 修・佐藤 淳一・長田 徹

○仙台市の学校教育の重点事項「開かれた学校づくり」(平成14年度～)

*具体的な取り組み ホームページでの学校情報の提供・学校行事への地域の方々の招待・地域清掃

○課題:イベントとして固定化、マンネリ化、学校のやらされ感や多忙感が増大し、学校からの批判

○「仙台自分づくり教育」生き方教育の仙台版 目的は、社会的な自立

*中学校の職場体験 自分づくり教育の重要な柱

→仙台自分づくり教育のスローガン:「社会を支える25歳を目指して」
なぜ25歳?…みんなが共通の視点を持つ。→小・中・高校を一本の糸でつなぐ

・職場体験を終えた生徒へのアンケート

これから身に付けたい力:1位…教科の学力 もっと勉強しなければいけない
→確かな学力の原動力

なぜこれが1位?…大人たちが本気で働く姿に心が打たれた
→自分も頑張らなくてはならない

→頑張ることは、勉強ではないか。←地域の力の

おかげ

・地域の方へのアンケート

来年も希望が8割。中学生の真剣な姿・活動が、地域の大人たちに新鮮な驚きを感じさせた

○文科省の学校支援地域本部事業

仙台市では、昨年度5つ、今年は合わせて12の支援本部を設置

スーパーバイザーと位置付けている方の大きな働き

- ・ネットワークを活用しての人集め
- ・ニーズに合った人選
- ・学校に入りすぎないようにするブレーキ役など

○「地域とともに歩む学校」全ての教育活動の基盤に位置付ける

- ・授業で学習活動を支えるかかわりなど
- ・新たな活動の創造と新たな理解者との協働
- ・地域を身近に感じる…地域を支える原動力

学校は、地域づくりの核であり、人づくりは、地域づくりの核である

○西山中学校の職場体験 …仙台市自分づくり教育 市内5校の指定校の内の一校

- * 学校の実態: 学力の低迷、学費未納家庭の増加、不登校の生徒が500人中40人
- * 生き方教育という大きな意味: 職人としての生き様、自信、活力
生きていくということは、働くということ、自立していくということ
- * 成果 ・地域の方の持っている熱い思い: 自分がこれまで経験してきたこととか働くということとか生きていくということについて、いっぱい伝えたい、思い
・本当に一生懸命働く、一人ひとりの生徒の働きが学校への信頼を深くしてくれた
・職場の活性化: 中学生を見るとすごく刺激になる。すごい緊張感、自覚を持つようになる。

●協議

- * 小さな町では職場体験に出したいと思っても事業所が少ない。大きな町に行っているいろいろな種類の職業を見て、いろいろな体験をさせること、地域の目の行き届かないところで体験させる方が子どもたちにとってよいのか。それとも、身近な職場、自分の住む地域で体験させる方が地域にとってもいいと考えるのか。
- * 発表の中に、社会教育の組織はどこにも出てこないが、これでいいのだろうか。
- * 隠岐の島町では、職場体験で地元の方々とふれ合いながら仕事をするのが大事だと考える。それがふるさつを見直すことにもなる。
- * どこまでが地域なのか。中学校の職場体験は、職業を体験するものではないと思っている。働くということを学ぶものだ。仕事を学ぶのは、インターンシップ。働くということを学ぶのだから希望のところに行かなくてもいいと思う。
- * 子どもたちを目の前にしている先生方が、この子たちにどういう経験をさせたいか。ということが一番大事だと思う。それを行政が縛りをつけることは、いかなるものかということだ。
- * 地元でやらなければ、学社融合における子どもたちの身近な社会とのつながりは、ないのではないかとと思う。
- * それが、地域はどこまでかということ。学区の中で納まる場合もあれば、隣の学区、違う行政区のこともある。どこまでが地域なのかということが難しい。遠くに行って野外活動をするのがよいということではない。
- * 息子たちの時は、東京に修学旅行に行った時に仕事の体験をしようと言っていたのに、半数以上が、泊まっているホテルのホテルメイクだった。将来自分が就職する、生活するエリアを地域と考えていたのでかわいそうだった。
- * PTAをやっていた頃は、子どものためにという活動をやっていて、それを長く続けているうちにもしかしたらこれは、我々の生涯学習ではないかと思い始めた。自分たちの生涯学習のためにと考えると地域にこだわってしまう。
- * 企業から見ても、地元とのつながりという発想はある。人や仕事を知って、そのことから自分の住む地域はなかなかいいとか、地域の方は頑張っているということから地域が近付いてくるのだと思う。小学校では、それを身近に感じるが中学では先のことも考えなければいけないし、それが一番大事だった。
- * 子どもたちの体験が不足している。本物にたくさん触れさせたい。教職員も50代のベテランと20代に2極化している。地域の人が入ってくださることで、お互いにプラスになっている。
- * 学社融合を踏み出す第一歩はどのようにしたらよいかということがあるが、厚木市の発表にはそのヒントがあるのではないかと。新しい組織をつくるのではなく、あるものを活用していくという意見が出されたが、これについて質問や意見はどうか。
- * 地域のお祭りなどが、中学生がかかると活性化する。実際に町内会のおじさん中心の行事が、実行委員会中心の行事に変わっていった。職場体験のねらいや目的は色々だと思う。きっかけはいろいろあるが、中学生が社会に出てきたことで、私たちが負担に思っていたことが盛り上がり、広い意味でつながりや活性化の土台になっているのではないかと。地域と学校と子どもたちの位置する状況の中で、いろいろなケースが生まれてくる。
- * 融合とは、一つになって新しいものを生み出すということ。だから、連携より融合の方がよいと思ってい

た。

文科省の学力向上拠点形成事業に関わりを通して、中学生を信じることは大事だと実感した。それぞれの実践にもそれを感じた。

- * 中学生を地域に出すためにはいろいろな苦労があった。場を作るために実行委員会などの会合に出たり、安全面を考えたりして、何週間もかかった。でもこれにより、中学生が成長するだろうと思っていた。

実はその逆で、大人たちが勉強になった。中学生の頑張る姿を見て大人たちが変わった。

学社融合といっても学校と地域の融合だけではない。これしかないと思わずに様々な融合を考えるとよい。

- * 大人も子どももそれぞれが学ぼうという姿勢がないと、学社融合をやっても両方に価値をもたらさない。Win and Win にならない。中学生が地域で学んでお年寄りの一生懸命な姿に自分の学びを振り返ることもある。そういう中で、思いやりや感謝の気持ちを学ぶ。そこに信頼関係が築かれ、学校にとっても子どもにとっても地域にとっても Win の社会に変わっていく。
- * 中学生にとって必要な知識や技術は何なのか。社会の中で体験しなければならないものは何なのか。このようなことを社会教育と学校教育がとともにやるということがポイントだと思う。
- * 社会教育団体がどう関わるのかは、重要な視点であると思っている。学校教育と社会教育が認識を共有することが大事だ。
- * 学社融合は目的ではなく、手立て。何が目的なのか。学校教育の中の不易と流行の不易に関わる思いやりや感謝する心というところに大人だけでなく、子どもも関わっていける。そんな手立てではないのかと思いながら話を聞いた。
社会教育の立場にあったころ、青少年健全育成事業の見直しをした。つながりのないたくさんの事業を参画、活用、拡大、交流、連携という5つの視点から見直した。これにより、新しい価値が生まれた。今も続いていると思う。

前日祭&融合研総会

フォーラムに先立ち、前日に下記のような「前日祭」と「融合研総会」開催されました。

- ① 対象: 融合研会員+大会実行委員+希望者(学習会のみ参加可)
- ② 日時: 平成 21 年 9 月 19 日(土) 14:00~
- ③ 内容: 14:00~ 学習会 学校と地域の融合教育研究会会長 宮崎稔さん
「学校と地域の融合のあり方を本音で語りあう」
・・・学社融合を支える信頼づくりとは・・・

16:00~ 学校と地域の融合教育研究会総会

16:30 以降 宿泊地へ送迎バスにて移動し、前日祭

- ④ 会場: <学習会> 厚木市シティプラザ6F ヤングコミュニティセンター(ホール 250)
<宿泊地> あつぎ飯山温泉「美登利園(みどりえん)」厚木市飯山 5157

アンケートより (お断り)

これまでは、フォーラムのアンケート集計結果を会報にも掲載してきましたが、膨大な量になりましたので、事務の都合上掲載を控えさせていただきました。詳しい内容を知りたい方は、融合研事務局か神奈川フォーラム実行委員会(青木信二神奈川支部長)にお問い合わせ下さい。「素晴らしかった」という内容が、大方の評でした。

2 役員会報告

年末の12月26日に恒例の役員会と忘年会が下記のように開催されました。

- 場所:パンゲア事務所
- 日時:2009年12月26日(土):14:30-17:00
- 出席者:宮崎稔(会長)、岸裕司(副会長)、渡辺善久(副会長)、宮崎雅子(事務局長)、青木信二(神奈川支部長)、永谷貴弘(プログラム研究開発委員長)、常田洋(監事)、小山みさ(監事)、矢吹正徳(事務局)、城佐知子(事務局)、佐竹正実(事務局・記録)

議事内容

I. 宮崎会長挨拶

富士宮フォーラムに向けて議論を期待する。

II. 神奈川大会について(青木支部長から報告)

- ① 会計報告:前役員会で報告の通り。本部協力に感謝。
- ② 所感:各方面から反響があり実施した甲斐があったと思っている。日産社からも高い評価をいただいた。今後の起爆剤になると思う。
- ③ 御礼状:日産側の責任者を確認し融合研としてお礼状を出状する。

III. 富士宮フォーラムの件(渡辺副会長)

原案をいただき論議。結論以下の通り。

① 決定事項

- ・ 実施日:平成22年10月3日(日)(9:30-16:00)
前日に前日祭(仮称)を行う。
- ・ 分科会:4分科会とする。(食育、家庭教育の2テーマは開催地として盛り込みたい)
- ・ 基調講演:富士宮側の人選で「はじめての学社融合」を盛込んだ形とする。
- ・ 富士宮市教育委員会との共催とする。
- ・ 大会会場は富士宮市役所。前日祭は芝川中学校。芝川公民館
- ・ 会費は昼食代を含め1,000円程度。懇親会は5,000円程度。

② 継続検討

以下について今後検討し詰める。次回役員会(千葉大会のころ)を目途とし決定する。

- ・ 前日祭の内容。(芝川こどもまつり視察、学習会、授業参観、講演会、ポニークラブカヘザル視察等の組合せ)ただし、融合研総会は前日祭の日に行う。

大会の分科会のテーマ、発表者人選。(本部、現地側で調整して行う。)

IV. プログラム研究開発委員会(永谷貴弘プログラム研究開発委員長)

永谷委員長の資料により討議。

- ① 調査研究の実施し、費用実費について本部負担する。(前回役員会結論確認)
- ② 研究・調査内容を検討するため事前に会員にアンケートを実施する。(役員会決定)
アンケートの内容、方式は委員会で検討・決定する。

V. その他

特になし

3 事務連絡

(1) 2011年度以降のフォーラム開催の立候補を受け付けます。

2010年度の融合フォーラムは、静岡県富士宮市に決定し準備が進んでいます。多くの会員の参加をお待ち致します。また、会員以外の方へもお誘いください。

それ以後のフォーラム開催について、近隣の人と相談したりして手を挙げてください。

自分ひとりだけでもその意向がある方は、「事務局へとりあえず相談」してみてください。現在のところ大阪支部の中に、その意向を持っている会員がいるようで、今後検討されるようです。

「2012年度以降なら」という地域でも構いません。「今は、まだあまり推進されていないから」という地域でも結構です。フォーラムを機会に、融合の推進が図られたという地域もごさいます。どうぞ、奮ってご応募ください。

(4) 2010～2011年度の役員の立候補を受け付けます。

一部の役員を除き、多くの役員は発足以来ほぼ同じメンバーです。会の活性化を図る意味からも新しい血の導入も必要とされています。役員になって融合研を改革したいというご意思のある方は、是非、「事務局まで」意思表示をしてください。お待ちしております。

編集後記（のようなもの）

会報40号をお届けします。今回は、神奈川フォーラムの報告と富士宮フォーラムの概要内容とが中心ですが、13年目を迎えた今、融合研の地道な実践のためにいろいろとご意見もあるかと思しますので、会員の意見を歓迎します。どうぞ多くのご意見をお待ちしています。（M）